力のあったことを示しており、先の嘉納の回想の中の自信を裏書きしている。即ち、これらのことから嘉納が柔道家に似合わぬ、数理の理解力、実力をもっていたということであり、石原の交番の前の数学的会話はその意味で、時に臨む武道家としての冷静さとともに、数学が他の人々にも平常心をもたせ、平静を呼び起す素材として恰好のものであったということが出来ると思われる。

以上、石原の名で登場してきた学生像が、東京大学在学中の嘉納と重ねる幾つかの条件をもっていることを述べてきたのであるが、石原らは会話の中でParallexe, Silentium, unbetangenという三つの単語を用いていることについても触れておきたいと思う。ことわるまでもなく、最初の語がフランス語で、これは、殺した雁を池の中から取ってくる時に、石原が蓮の茎が折れている、その延線に沿って進むので、それをはずれそうになったら、こっちらから修正してくれていったのに対し、岡田が用いた語。あとの二語の最初の語は、交番が近くなったときに石原がドイツ語で「静かに」と注意した語、あとは、無事に巡査の前を通ったあと石原がこれもドイツ語で、「こだわりのない態度」をあの公式で保てたとする、不動心につながるこだわりのないことを説明した語である。

というのは、嘉納にドイツ語の理解があったかどうかということにつながるのであるが、この程度の単語の使用は、学生間の一種の衒気として、さして珍らしいことではなく、語学を得意とした嘉納が、ドイツ語を主なる外国語とする岡田や僕の医学生に、ドイツ語の断片を意識的に用いたと見るなら、さして不自然でないであろう。

その辺は、岡田が石原にフランス語の単語で、「視差(パラックセ)のような理窟だな」と応じたのと同性格の行為であったということである。

「雁」に登場する学生の一人、石原と嘉納治五郎との共通の幾つかを挙げてみると、そこにかなりの近似がある訳で、鷗外はこれらを綜合してその人物像を自作の中に登場させ、それによって繊細な感受性に生きた青春期を浮び上らせようとしたのではあるまいか。

そして、この作に登場する学生の中で石原一人が異和感をもたらすのは、医学部にあっても広い知識と教養を身につけることを目指した鷗外の眼には、柔道にひた向きに打ち込み、その修行によって人間形成を目指した嘉納らしき人物が与えた、自分たちとは違った存在という、その頃の実感が残っていたからだと思われる。

（註1）明治十年四月、東京医学校と東京開成学校が合併した折、嘉納は開成学校に、鷗外は医学校にいた。若し、東京大学文学部、医学部の開講が九月とするなら、柔術以前の嘉納と鷗外と一時期同じ学校で学んだことになる。

（註2）鷗外自身は同旨の精神のあり方を「常住智」と言っている。

る。引用してみると、次のようである。

「不動心とは動ざる心なり。心正明にして惣身へ気満ち渡りて剣を眼で見るとも心に見ず。或は大筒の音を耳に聞きくとも心に聞かずして物事に動じ動かざる所なり。これを大丈夫といふ。」

ここの個所は、大丈夫の条件としての不動心を説いたもので、心の正明、気の充実によって周辺の出来事に心を動かすことがなくなるというのである。

更に続けて、

「大丈夫の動かざる心にて、この心を動かして千変万化の業を自在にする時は、千万の大敵といふとも動かず。この心をさして不動心の位といふなり。」

と述べている。

ここの「大丈夫の動かざる心」と「この心を動かして」は矛盾した言いであるが、大まかな説明をしてみると、周辺の小変化、動きにこだわり、それに対応して心を動かすのではなく、動じない心をもつようにし、同時に、この冷静で全般を見渡す心によって、次の行動に移る。即ち、変化に対応して心を動かし技を自在に施してゆくという教えである。

石原は、この「不動」を説いたのであり、不動の修行練成をもたぬ友人二人にこれを説き、それがどうもうまくゆかぬと見て、咄嗟に数学の公式を意味有りげに説明することで、交番の巡査に対するこだわり、意識を分散させ、心の特定の動揺を抑えたということになる。「君たちは修養がないから、急場に臨んでそれを実行することができそうでなかった」というのは、石原の僕と岡田ら、武技無経験者に対する判断であり、同時に、かなり柔術の修行を積んだ自己への信頼と自負を明らかにした言葉でもあったのである。

それから、石原が友人の不動心をひき出す際に、数学の公式を持ち出したという点について、嘉納が数学を得意としていたかという点である。数学といっても、円錐の容積を出す程度の計算法は今日では中学生程度でも知識として持っていると思われるが、明治十年代では、まだ洋式計算法が移植された初期であり、一般の理解のとどくところになかったことを考えてゆけば、大学生間のやや高等の話題と見ることが出来るであろう。

そこで嘉納の数学であるが、回想の中で、

「もし自分が趣味、長所のみから割出せば自分は天文学者になったろうと思われる。自分は幼少から数学が得意で、天文が大好きであった。」しかし、「今仮に自分が好きな道で天文学者になったところが、学問上から世に一種の貢献をする事が出来るかも知らぬが、それは自分以外にそういう人を作り得る。」「自分は一つ政治家になって世のために大いに尽したいという考えを懐」いた。

と言っている。この、数学が得意でという言葉を裏付ける事柄として、東京英学校時代の成績表がある。これは、下等第一級生、嘉納仲之助、明治八年第二期の試験点等標で、それによると、各課百点が高点で、成績、英語読方八四、綴字八〇、算術九〇、文化八九、地理九〇、歴史九〇、作文八〇で、席次は五となっている。

地理、歴史と並んで算術の九〇は、人文系とともに理科系の理解

あり、それが障礙物となるからである。

結局、無縁坂の道をとることにする。石原は、

「雁は岡田に、外套の下に入れて持たせ、あとの二人が左右に並んで、岡田の体を隠蔽していくのが最良の策だといふのである。」

石原と僕は岡田を中にはさんで歩いてゆく。外套の下に入れた雁は、裾から二、三寸出、裾は不恰好にひろがって岡田の姿は円錐形に見える。

石原は、交番の前を通り抜けるときの心得だといって、盛んに講釈をする。それは、

「心が動いてはならぬ。動けば隙を生ずる、隙を生ずれば乗ぜられるといふ」「虎が酔人を噉わぬ」という譬であった。「多分この講釈は柔術の先生に聞いたことをそのまま繰り返したものかと思はれた。」

ここで石原が説いたのは、不動[註1]ということである。このあと、交番の前の巡査が見える位置に来たとき石原は、岡田に数学の公式について質問する。

「君円錐の立方積を出す公式を知つてゐるか。なに。知らない。あれはざうさはないさ。基底面に高さを乗じたものゝ三分の一だから、もし基底面が圏になってゐれば、$\frac{1}{3}r^2\pi h$ が立方積だ。$\pi=3.1416$ だということを記憶してゐれば、わけなくできるのだ。僕はπを小数点以下八位まで記憶してゐる。πは 3.14159265 になるのだ。実際それ以上の数は不必要だよ。」

こういっているうちに、三人は四辻を無事に通り過ぎ、巡査は一行に無意味な一瞥を投じたにすぎなかった。

僕は石原に何故、円錐の立法積などを計算しだしたのだと聞く。それに対し石原は、

「僕は君たちに不動の秘訣を説いて聞かせたが、君たちは修養がないから、急場に臨んでそれを実行することができさうでなかつた。そこで僕は君たちの心をほかへ転ぜさせる工夫をしたのだ。問題はなにを出してもよかつたのだが、いまいつたやうなわけで円錐の公式が出たのさ。」

と答えるのである。

鷗外作品の上でのこの場面の効果は、四辻に立っている巡査の前を通り過ぎ、石原に、先記の質問をする。それと同時に坂の中ほどに立ってこちらを見ているお玉の姿を認める。女は岡田を待ち受けている。岡田も女を認めて顔を赤らめる。

女の方の、「美しくみはった目の底には、無限の残り惜しさが含まれているやうであった。」ほのかな恋心を寄せる二人が運命の中で別々な人生をもつという、作品主題を表面的にする場面で、先の雁の悲運と心理的に重ねてゆく重要な伏線となる個所なのである。

石原が、そうした岡田と女との内面的な葛藤については全く気付くこともなく、不動の秘訣について話しつづけているのも、登場人物の対比の上で効果をもっている。

それでは、嘉納が修行していた天神真楊流に不動ということが説かれていたであろうか。この点について述べてみると、『天神真楊流大意録』で「不動心」ということを修行者の心得として説いてい

てることが出来るのだと岡田に誇示する語気が汲み取れるからである。

池にいる雁に石を当てる投擲力、これが嘉納とどう結びつくのであろうか。この点を眺めてみると、嘉納が野球のピッチャーをやったことがあるということと関わってくる。

自伝によれば、

「自分の大学の友人で本山正久という人がおった。これは東京大学の法学部第一回の卒業生で明治十一年に卒業したのだから自分より先輩でもあり、科も違うがこの人とは大学でベースボールを一緒にやった関係で懇意にしていた。自分がベースボールの選手だといったら不思議がろうが、その頃自分は五代竜作とともにピッチアで、本山と塩田仁松とがキャッチャの選手であったのだ。」（「柔道家としての私の生涯」）

である。勿論、初期の野球でまだナインボールで出塁し、ピッチャーは、投げ込む位置を予めバッターに告げ、そこを球が通らなければボールとするという時期のものであるが、兎に角、野球の選手として、特にピッチャーとして、素人と較べて投擲は的確である訳であり、雁に当てる自信を持っていたのは当然であったということになるのである。

野球に打ち込んだ度合については、柔道をする前に、

「自分は以前からいろいろの運動をやってはみた。器械体操も少しはやった。駈けっこもやった。船も漕いでみた。遠足もした。もっとも多くやったのは球投げ、ベース・ボールであった。」（「柔道家としての私の生涯」）

と、「もっとも多くやった」とし、これらの運動体験の反省から柔道に転じたとしている。

先にも記したように嘉納の柔道は、虚弱であった身体を鍛えるのを目的としていたところから、ボートは水の近くに住まないと、そこへ行くまでの距離と時間の無駄があり、同時に過労になる。遠足は、日曜がその他の休日しか出来ないので、疲れる割には身体の鍛錬が出来ない。

野球は球を投げるだけの局部的なもので、全身を発育させるには効がうすい。ベース・ボールとなると広い場所が必要であり、一組やれば他は出来ない。投手、捕手はまだよいがフィルダースには活動の機会が少い。ベースメンは多少活動するが種類が局限される。そのため、これよって全身を鍛えるというには不完全だと考えたことに基いている。

しかし、そのような野球観とは別に、石原の運動神経とピッチャー経験が投石の自信の裏付けとなっていたと見るなら、柔道と重ねて嘉納の姿が浮び上ってくるのであろう。

あたりが暗くなってから雁を手に入れた三人は、その雁をどのようにして石原の下宿にまで持ってゆくかを工夫する。というのは、湯島切通しから岩崎邸の裏手へ出る横町の曲りくねった奥にある石原の下宿へ辿りつくまでに、ここからは無縁坂を経る道、南から切通しを通る道の二つがある。どちらを選んでも途中に巡査派出所が

となっている。この回顧談の中の、「課せられたる学科目に対していづれも及第する程度にはやった」とか、「学問を第二とし」という言は、そのまま、学課に重点を置く勉強を進めたということで、学科のほかの本を読まぬ学理であると、鷗外のように多方面の学識を身につけようとする学生から見れば映ることは当然であったといえよう。尤も、全く読まなかったのではなく、

「ハミルトンのメタフィジックスのような大冊の本を読了している。(多分開成学校時代とおもう)」(「柔道家としての私の生涯」)

と語った部分もあるが、嘉納自身の学問に対する考え方として、

「運動を盛んにやるようになって考えた事は、人間は本ばかり読んでも大事をなす事は出来ぬ。大事をなす者には本も読まなければならぬけれども、人物を磨かねばならぬ。学問は手段であって大事な事は人間を磨く事である」

という基本に立っていたのであり、運動、即ち、柔道をはじめてから、最少限の学習に止めたことも容易に想像出来るところである。

こうした嘉納について、学友の一人であった大江敬香は、

「資性忍耐、悲観を意とせず、在学の日其務むる所を務め、亦其席次の上下に心を用ひず、明治十四年七月大学の業を卒ふるや職に学習院教授に件せり」(「嘉納治五郎氏の育英」『嘉納治五郎』)

と伝えている。この、「在学の日其務むる所を務め」は、学科目に対する学習の態度を巧みに言ひあらわした言葉で、「学科のほかの本はいっさい読まぬ」学生の別な角度からの表現と見ることが出来るのである。

鷗外の「雁」では、石原と岡田、僕の三人が池のほとりに立ち、根津に通ずる小溝の方へ茂った葦を見ながら会話をもつ。引用してみると、

「茎の間を縫つて、黒ずんだうえに鈍い反射を見せてゐる水の面を、十羽ばかりの雁がゆるやかに往来してゐる。中には停止して動かぬのもある。『あれまで石が届くか』と、石原が岡田の顔を見ていつた。『届くことは届くが、あたるか、あたらぬかが疑問だ』と岡田は答えた。『やつてみ給え』岡田は躊躇した。『あれはもう寝るのだろう。石を投げつけるのはかわいさうだ』石原は笑つた。『そうものゝ哀れを知りすぎては困るなあ。君が投げんといふなら僕が投げる』岡田は不精らしく石を拾つた。『そんなら僕が逃がしてやる』つぶてはひゆうというかすかな響きをさせて飛んだ。」「『あたつた』と、石原がいつた。」

不忍池の雁に石を投げてこれを殺し、食用にするという、明治の学生らしいバーバーリズムというべき行為を描いており、小説自体としては、雁のいるところをねらって投げた石が、偶然にも本当に雁に当り、雁は死ぬ。その不仕合せな雁によって、無縁坂の女の不幸な運命を暗示するという伏線として書き加えられている個所であるが、石原自身に注意してみると、石を投げて雁を殺す自信、雁に石を当てる自信をもっていたことがわかる。

「あれまで石が届くか」の問に対して、岡田が、あたるかどうかは疑問と答え、可愛そうだということでためらうのに対し、「君が投げんといふなら、僕が投げる」と言い切るその裏には、自分は当

形で伝わるような出来事であったであろうか。

一つは、明治十二年七月、アメリカ前大統領グラント将軍が来日した折、渋沢栄一の飛鳥山別荘で磯正智、福田八之助その他の名家に互して、学友である五代竜作を相手に柔術の技を披露している。嘉納と渋沢は、渋沢が週一回、経済学の科外講師として大学に出講していたことから知っていたもので、この関係からの参加と思われる。同時に、福田にしても（病没一ヶ月程前）異存はなかったと思われるし、福田没後の磯正智への入門もこの辺を機縁としているのかもしれない。ともあれ、このことが渋沢、或いは五代を通じて学内に知られる可能性はあった訳であり、福田、磯と出場したことでかなりの力量という評価を得たことも考えられる。

更に、嘉納の柔術を大学内で印象づける出来事が翌十三年に行われている。それは、当時、柔術の名門と目されていた千葉の戸塚一党が大学に招かれ、講堂を道場として形や乱取などをやってみせたことがあった。その席には大学側の講師は勿論、山田顕義なども来賓として招かれており、大学生も参観している。

嘉納は乱取がはじまると、参観していた大学生の中から、唯だ一人、審判者の許可を得て稽古着をつけて参加するのである。それを見ていた井上哲次郎の感想によると、「学生の中にも雄々しき者があるよとばかり、一同驚いていると、それが嘉納君であった。」ということで、参観者に強烈な印象を残したことがわかる。

東大第二期[註2]の文学部の卒業生は、嘉納の他には末岡精一、坪井九馬三、都築馨六、辰己小次郎、田中稲城の五名であり、大学の他学部の学生数を合せても少数であったことから、こうした嘉納の柔術への傾倒振りが、大学全体に知られること、他学部の鷗外の耳にも入ってゆく機会は十分あったと見てよい。

又、大学の行事からいうと、明治十二年度からは卒業式ではなく学位授与式が行われるようになり、法文理学部は一つ橋校舎で第一回学位授与式を行っている、（七月十日）。医学部の第一回学位授与式は十月十八日で場所は本郷校舎である。法文理と医学部は別な場所、別な日に行っていた学位授与式が、嘉納、鷗外の明治十四年から、同じ一つ橋校舎で合同で、同じ七月九日に行われるようになっている。嘉納の文学部六名、鷗外の医学部は二十八名で、六名の中の嘉納を見知るということは、人数からいっても自然のことであったと言えるであろう。

このような、柔術に凝ることの他に、

○　学科のほかに本を一切読まぬ

という学習態度で、この辺嘉納の回想によると、

「当時自分は、もとより課せられたる学科目に対していずれにも及第する程度にはやったのであるけれども、今から考えるともつと普通学に力を入れておけばよかったと残念におもう。」（「精力善用の説の芽生」）

「学問を勉強したのも、やはり負け嫌いからやったので、後には学問はやりさえすれば出来ない事はないと思ったので、学問は第二とし身体の方に力を用い、ベースボールもやれば舟を漕ぐ事もやり進んでは柔道をやり始めたのである。」（「回顧六十年」）

活用法を学んで帰朝。日本では、陳元贊を祖とする拳法が福野流柔術、三浦流柔術として各地に伝播していたので顧みられなかったことから発奮し、筑紫の太宰府に赴いて菅公大神廟に祈願をこめ、形手の工夫を積んで捕手三百手を生み出した。これが真揚流で流名は天神廟の前の大きな柳に雪が降っても積らないことから大悟し、楊心流と名付けたとされている。

貞享年間に、中興の祖と言われる大江仙兵衛広富が出、楊心流は門下の三浦定右衛門に継承され、一方、山本民左衛門英草は真之神道流を開いた。真之神道流はそのあと土肥無端斎安信、本間丈右衛門正藤と伝わり、楊心流は一柳織部に伝わったところで磯又右衛門正定が両派を合せて天神真楊流を開くのである。別に山本民左衛門は神当流を開いている。

天神真楊流の長所は当身技と固技であった。嘉納は、師の福田八之助が明治十二年八月に没したため、天神真楊流三代目の家元である磯正智に入門する。ここでは、正智が病没する明治十四年六月まで修行を続けている。

この明治十四年六月というのは嘉納が東京大学を卒業する一ヶ月程前にあたり、正智の後は別な柔術流派である飯久保恒年に学ぶ。そして、この、天神真楊流から起倒流という異派を学んだ感想としては、

「我流では咽喉をしめるとか、逆をとるとか、押し伏せるとかいうことを主としている。投げもやるにはやる。巴投とか、足払とか、腰投とか、やることはやったが、起倒流とはよほど掛け方などに違いがあることを発見した。飯久保先生は当時すでに五十歳以上に達しておったが、乱取も相当よく出来たので、自分は熱心に稽古をした。」「自分は本気に新しい研究に没頭し、真剣にわざを錬った。」という印象を記しており、新しい柔道を興すための異質の流流を学んだ、プラスの面を語っている。

なお、磯正智は同流三代目で、二代目の初代の息又一郎は早く亡くなり、松永清左衛門が磯家の三代目を継いで改名したのである。幕末の柔術界の大家として遇され、お玉ヶ池に千葉周作の道場が接近した位置にあり栄えていたと伝えられる。

又、起倒流の祖は茨木専斎後房で、福野七郎右衛門正勝と共同で良移心当流を先ず興している。後房は柳生家の人で、この良移心当流に新しく起倒流の名をつけ、鎧組打、棒、居合、陣鎌などを綜合化した。正勝の方は貞心流の寺田平左衛門定安と関わりをもって変化をもち、定安の弟の八左衛門に伝わり、その子の勘右衛門正重以後、直心流柔道の名を用いている。

正重の門人、吉村扶寿の系統は起倒流の名で貞安以後の流れを伝え、扶寿門の堀田佐五衛門頼庸を経て滝野専右衛門貞高に伝わっている。貞高は道場を京都に開いたが、起倒流伝書を江戸へ流布、のち、江戸に出て浅草に道場を開いた。飯久保恒吉は貞高系で、竹内鉄之助一清の門下であり、それが嘉納に伝わるのである。

× ×

それでは、このような嘉納の柔術が大学関係者の眼に触れる機会があったかどうか。少くとも、同時期の大学在学生の耳に何らかの

かる。

そこでこの頃柔術に凝っていた東大生ということになるのであるが、鷗外と同じ年、同じ月日に文学部を卒業した嘉納治五郎が浮び上ってくる。

嘉納治五郎は、万延元年（二五二〇）の十月十八日、兵庫県武庫郡御影町浜東本邸で嘉納次郎作の三男として生れている。父の希芝は後に海軍權書記になった。明治四年に東京在住の父親に迎えられて上京。明治六年から、芝の烏森町にあった育英義塾に学んでいる。翌明治七年から東京外国語学校の英語部へ入学。間もなくこの学校の英語部が分れて官立の英語学校となり、翌八年に開成学校と合併したことからここに移り、明治十年に創立された東京大学文学部に入学している。

この当時は、法学部、理学部、文学部の三学部があり、文学部には哲学、政治学、理財学の三科目があった。履修方法は、三科目の中のどれか一つを主要科目とし、他の一科目を兼修することが出来た。

兼修するかどうかは随意であったが、嘉納は政治学を主とし、理財学を兼修している。

嘉納が柔術に関心をもつのは、虚弱な身体であったことによるもので、肉体的にはたいていの人に劣っており、往々他から軽んぜられたからだ（「なぜ柔道をはじめたか」『柔道家としての私の生涯』嘉納治五郎著作集　第三巻所収）と語っている。そして、

「学問上ではたいていのものに負けないとの自信がありながら、往々にして人の下風に立たされた自分は、幼少の時から日本に柔術といふものがあり、それはたとえ非力なものでも大力に勝てる方法であるときいていたので、ぜひこの柔術を学ぼうと考えた。」（同上）

ところが、維新直後の、日本的なものが全面的に否定されようとする風潮の中で柔術を学ぶ機会は仲々得られず、自分の家に出入りする旗本で中井というものに頼んだが、今時そんな必要はないといって顧みてくれなかったのを最初とし、父の別荘の番人をしていた片桐が柔術を学んだということで頼んだが、やはり必要がないといって断わられている。のち、肥後の今井という汲心流の柔術を学んだ人物にも断わられ、明治十年になってはじめて天神真楊流の福田八之助に入門し、稽古をはじめるのである。

九畳の道場で、次の三畳の間が整骨の治療所という住居で、たまにくる人が四、五人。毎日来るのが一人、隔日にくる人が一人あるだけであったとしている。

実は、この福田の道場に入門するまでに、整骨をする人が昔の柔道家の名残であることを聞き、あちらこちらにいってみて柔術をするかどうかを聞いたが多くは知らず、或は昔やったが今はやらないといって相手にされず、ある日人形町通りの路地を入ったところで整骨の看板を見つけた。それが八木真之助で、八木は八畳一間の生活でどうにもならないからということで福田に紹介されたという事情であったという。

天神真楊流は、秋山四郎左衛門義時が医術修行のために中国に渡り、勉学のかたわら博転という中国人から三手の形と、二十八種の

と僕が励ますのであるが、この会話を通して、岡田の大学卒業が近いことと、医学を専攻している学生であることが浮び上ってくる。そして、この岡田が鷗外の分身であると同時に、卒業少し前にドイツに往った緒方収二郎であり、僕が客観視する鷗外の眼であることは、これまでも多くの人々によって指摘されている。

ここで少し、明治開化期の医学のことに触れておくと、明治政府は維新直後に西洋医学に拠ることを明らかにしている。即ち、明治元年十二月七日の太政官布達の中で次のように述べる。

「近世不学不術ノ徒ミダリニ方薬ヲ弄シ生命ヲ誤リ候モノ往々少ナカラザルヤニ相聞キ大ニ聖朝仁慈ノ御旨趣ニ相背キ甚ダ相済マザルコトニ候　今般医学所御取建ニ相成候ニ付テハ屹度規則相立テ学ノ成否術ノ工拙ヲ篤ト試考シ免許之アリ候上ナラデハ其業ヲ行フコト相成ラザルヨウ遊バサレタキ思シメシニ候」

これは、厳格な医師試験をするということなのであるが、この文中に見える「医学所」というのは、幕末に江戸在住の蘭方医が設けた私立の種痘館からはじまり、万延元年に幕府の直轄となって種痘所と改称、その後、西洋医学所、医学所の名称で明治に引き継がれた。この施設を接収するのは明治元年の六月で、従来の職員に代って薩摩藩の前田信輔が管理するようになり、次いで、翌七月に医学所は軍陣病院と合併して大病院となっている。

翌二年には、佐賀藩の相良知安と、福井藩の岩佐純が医学取調御用掛に就任。五月になって大病院が医学校兼病院と改称され、十二月には大学東校となって医師の養成の第一歩を踏み出すのである。

ところで、明治政府にとって、ヨーロッパのどの国の医学を範とするかということは問題であった。それは、イギリス人医者ウイリスが維新の戦争の際に政府軍のために働いて功績をたてており、政府内に勢力をもっていたからで、ウイリスは当然のこととしてイギリス医学による医事体制を目指していたからである。

これに対し、相良、岩佐はドイツ医学を学んでおり、大学東校の主宰者として佐倉藩から招かれた佐藤尚中は先の二人を順天堂で教えた人物で、言ってみれば、医政を担当する主要な立場にある人物の医学がドイツ系であったという実状にあったのである。結局、ウイリスは東京を去って、鹿児島に医学校をつくることになり、明治三年から政府は本格的にドイツ医学を移植することに力を注ぐことになってゆく。

ドイツ連邦公使との間に医学教師二名を三年の期限でやとう契約をきめ、四年八月にミュレルとホフマンの二人の軍医が来日、文部卿大木喬任の下で医学教育に従うのである。

大学東校は明治五年の学制発布とともに、第一大学区医学校となり、鷗外は明治七年一月に、下谷和泉橋にあったこの医学校に入学している。修学年限は予科二年、本科五年。

明治九年十二月に医学校は下谷の旧藤堂屋敷から本郷本富士町の加賀邸跡に移り、翌年に東京大学医学部となっており、鷗外はここで本科生となっている。

卒業は明治十四年の七月九日で、卒業ま近の出来事とすると、明治十三年、十四年頃を背景にして「雁」が書かれたということがわ

森鷗外「雁」のモデル

――石原と嘉納治五郎――

松井利彦

森鷗外が「スバル」に明治四十四年九月から大正二年五月にかけて発表した小説「雁」に石原という学生が登場する。

この小説の中心となる人物は、医学生の岡田と岡田に関心を寄せる金貸しの女お玉、それを傍から眺める位置にいる僕ということになるのであるが、終りの部分で、運命ということを暗示する出来事に姿を見せるのが石原である。

岡田と僕は散歩も兼ねて上野の不忍の池の辺りを歩く。福地桜痴の二際造りの家など見たあと池の北の方へ往く小橋を渡る。

「すると岸の上に立つて何か見てゐる学生らしい青年がゐた。それが二人の近づくのを見て、『やあ』と声をかけた。柔術に凝ってゐて、学科のほかの本はいつさい読まぬといふ性(たち)だから、岡田も僕も親しくはせぬが、さうかといつて嫌つてもゐぬ石原といふ男である。」彼は僕や岡田と略同時期に大学にいた人物で、

○　柔術に凝っている、

○　学科のほかの本を一切読まぬ、

という、特徴をもった人物である。

岡田が散歩しながら僕なる人物に話そうとしたことは、

「卒業の期を待たずに洋行することにきまつて、もう外務省から旅行券を受け取り、大学へ退学届を出してしまつた。それは東洋の風土病を研究しに来たドイツの Professor W が、往復旅費四千マルクと、月給二百マルクを給して岡田をやとつたからである。」

という内容であった、二人は蓮玉庵という蕎麦屋に入って蕎麦を食べる。岡田が、

「せっかくいままでやつてきて、卒業しないのは残念だが、所詮官費留学生になれない僕がこの機会を失すると、ヨオロッパが見られないからね。」

というのに答えて、

「そうだとも。機逸すべからずだ。卒業がなんだ。向こうでドクトルになれば同じことだし、またそのドクトルをしなくたつて、それも憂ふるにたりないじゃないか。」